



宿屋の富

試し読み

§ 柳多留選集 §

女郎買仲間へとんだ仲間なり

「いかにも、わちきがような者は金を稼ぐために、嘘を言うのが商売。それも、ぬしに会うまでの事サ。これからは、ホンと誓ったぬしが為、媚は売っても、わちきがジツは売りイセンよウ」

ざわざわと各々の営みに没頭する騒音に紛れさすまいと、息が掛かりそうな程、顔を寄せてなお、しおらしく言う。

横座りした上半身が、自分に寄り掛かりそうに乗り出してくる。頬を赤く染め、目尻が少し潤んでいるように見えるのは、遠くに置かれた有明行灯の加減だろうか。

緋縮緬の襦袢の下から覗く素肌は抜けるように白く、ぬめるような妖しい艶を放っている。

ためらいがちに上目使いで見つめられるだけで、口の中がからからになる。頭がくらくらして、気が遠くなりそうだ。

「…ああ」

やっとの事で口にした言葉も、相づちしか打てない。この女郎に、己ほどんな風に見えるのだから。

そんな己の考えを読み取ったように、くすつと女郎が笑う。

「ぬしヤア、ホンに無口だのう」

つい、と流れるような動作で煙管を吸い付けると、

「サ、一服お飲みヨ」

と、煙管を差し出してきた。

ほんの一瞬触れ合う指先に、びくりとおののいた。相手も恥ずかしげに顔をうつむけて、そつと口元を袂で隠す。

緊張の余り震える手を、隠すように吸い慣れない煙管を口に運ぶ。女郎らしい細長い紅羅宇だ。

女は、己の一举手一投足を見逃してなるものかとも言うように、じつと見つめている。黒い大きな目がきらきらと瞬く。

それを目に留めた己はざわりと胸の内が蠢くのを感じた。また同時に、無上の幸福感と寂寥感、そして強烈な独占欲が押し寄せ、何とも言えない気持ちになる。感じたことのない思いを持って余してしまつて、尻が落ち着かない。

そもそもこんな気持ちになつた事が今まであつただろうか。

女と言えば、気の利かぬだの、馬鹿だの、ぐずだの、ウドの大木、うすのろだのと罵られた思い出しかない。母も姉妹も、女房ですら、溜め息を吐くか、痛罵を浴びせるかだ。

だから、押し並べて女は己のような男は嫌いなだろうと、そう思つてきた。

商売女ですら、相手にもしてくれまいと、この妓楼に誘われた当初は渋つたのだ。

が、ただ一人の友人に無理矢理ひっぱつて来られたここで、こんな優しい扱いを受けようとは、夢にも思わなかつた。

目の前の女は、罵りもせず、溜め息も吐かず、優しい言葉を掛けてくれる。あまつさえ、らくだ、と呼ばれた己の巨軀を頼もしいと言つて、抱き付きさせた。

夢ならば覚めないでほしい、イヤ、もう、夢であるならば、目覚めた瞬間に死んでも良いと思つたくらいだ。

イヤ、それは出来ない、と悲しく思い直す。
この衝立てで仕切られただけの大部屋のどこかで、馴染みの女郎を相手にしているあいつには、返し切れぬ恩を受けた。
この大恩返すまでは死ねるものか。

「…寒い…」

小糸と名乗った目の前の女郎は、ぽつりと呟くと、継りついてきた。

「あ、あ、こ、これを…」

物思いを破られて、すっかり女郎を放ったらかしにしていたことに気付いた。罰の悪さからへどもどししながら、友人から借りた羽織を脱ぎ出す手を押し止めて、小糸は

「イヤイヤ」

とかぶりを振ると、首にしがみつきのまま倒れこんできた。

受けとめられず、そのまま己も後向きに倒れこんでしまい、枕元に下げてあった台の物が頭がぶつかった。がちやりと陶器が予想外に大きな音を立てる。

一瞬、大部屋が水を打ったような静寂に包まれた。

今の音は何事かと聞き耳を立てているのだ。

「…ああ、もう…」

小糸が切ない声を挙げ、首に回した手に力を入れる。その次の瞬間、割床に物音が甦った。

「堪忍しとくれ。痛むかえ？」

それぞれの衝立ての中の営みに戻っていく音が響き始めて、小糸は口を開いた。

うう、だか、ああ、だか判然としない言葉を口走った。

「ぬしヤア、随分と手慣れておいでだねエ。わちきからせがませるなんざア憎らしい」

ふふつと笑って小糸は、脇腹をちよいと爪つた。



女郎のねたり事ハ肝がつふれる

…小糸め、やりすぎだア。下戸に飲ませすぎだぜ、頭なんざまともに働いてねえんじやねえか。

源太郎は半ば呆れながら、それでも口を笑みの形に歪めずには居られなかった。

今日の敵娼はすでに疲労困憊、だらしなく口を半開きにして眠り込んでいく。

したがって、源太郎はうつらうつらしながらも、衝立てを挟んだ隣の様子を心置きなく聞き耳を立てることが出来る訳なのだ。

暫らくは、物慣れぬ与乃介の戸惑いと、それをあやすかのような小糸のやりとりを微笑ましく思っていたが、その内源太郎は慌てながらもどうすることも出来ない己を歯痒く思い始めていた。

源太郎は、幼馴染みの与乃介をこの妓楼に連れてきた。

与乃介は、表店で乾物を営む商家の息子だ。

姉二人妹一人の女ばかりに挟まれて生まれた長男だが、気が強く才気煥発な娘たちとは全く正反対だった。

長じるとつれて才能も伸びるのではないかと期待されていたが、歳を追うごとに家内でびくびくし、何の才能も表さないのに呆れた母が元服の際に「余

計者」と言う意味で、「余乃介」ならぬ「与乃介」と改めさせたと言う。

もともとは、更なる才気を願って「才蔵」と言う幼名だったのだから、随分ひどく思われたものだ。

本来は小さな頃から父の傍で商売を覚えていくものだが、今は、主に船で運ばれてきた荷降ろしの指示を任されているようだ。

そんな与乃介を、裏長屋で育った源太郎は、いけ好かないぼっちゃんと思つて、余り仲が良かった覚えはないが、久しぶりに出会った与乃介は、道を通る女にもびくびくする有様で、何だか放っておけなくなつてしまったのだ。背は大きいものの、面は特別醜いわけでもなく痘痕もない、普通の男だと思ふ。

それが、傍を通つた女は猫でも怯えるなど、尋常ではない。

確かに源太郎の中に、与乃介を妓楼に連れてきたら、どんなに狼狽えるだろうか、見てみたいと言う悪戯心が無かつたとは言えない。

反対に多少荒療治ではあるが、妓楼で、男としての自信を付けさせてやろうとも思つたのだ。

銭に執着が強く、素振りが大げさなきらいはあるが、どんな堅物もあしらえる女郎、小糸に言い含めて、与乃介にあてがつた。

初心者や扱いにくい客も難なく扱えると評判の小糸ならば、源太郎も安心だ。

恐い女ばかりではない、と言うことが与乃介に伝われば十分なのだから、商売女とは言え、優しくされ頼られれば、与乃介の態度も変わるはずだと思つていた。

が、そんな思惑を超えて事態は違つて展開を迎えようとしていた。

「ぬしのような、頼もしいお人は初めて」

とか、小糸が持ち上げている間は良かった。

多少緊張を解すために、酒を勧めるのも良いだろう。

だが、幾らなんでも酒を立て続けに一升も飲ませるのはやりすぎだ。

与乃介は酒をたしなまぬはず。しかし、これだけ飲んでべろべろにならないのは、緊張しているからかも知れぬ。酒で乱れないのなら、心配は要らないようだが、その勘定は、源太郎が払うのだ。

おまけに、そろそろ事に及んでも良いはずなのに、どうにも二人の様子がおかしい。

周りは既に事を終えつつある刻限だ。引け間際上がった者ですら、酒肴も事もとうに終え女郎を腕に掻き抱きつつ、微睡み始める頃合い。

なのに、未だ同禽もせず、ぐちゃぐちゃと小糸の話す声ばかりがするのはどうした訳なのか。

与乃介は自ら望んだ訳ではないとは言え、妻帯者だ。女を抱いたことがないとは思えないが、幾ら奥手の男だろうと、こんな周りの睦事が筒抜けの状態で女と対峙して平静で居られる訳がない。

がちやり、と一際大きな音が、辺りに鳴り響いた。隣で寝ていた女が、びくりとし、ごろりと寝返りを打つた。

そして小糸の「ああ、もう…」と言う声が聞こえた。

大きな物音に様子を伺つていた気配に、ざわめきが戻ると、また隣の話し声に戻ってくる。

ふむ、小糸め、何か企んでやがるな…。

源太郎は、小糸をあてがつたのは失敗だったかと、悔やみ始めた。

何せ、小糸は目を付けた客を散々その気にさせておいて、搾り取れるだけ金を搾り取ろうとする癖があるのだ。

これさえなければ…。いや、女郎は年季が明けるまでは、息を吸うだけでも何かと金の掛かる身。当然金を稼いで行かねばならない。

だが、客はそれを判つた上で尚、性欲処理と言う欲望と、女を思うままにしたいと言う欲を固塗して、仮初めの夢を求めて来ているのだ。例えこのような羅生門河岸の半籬の妓楼であっても。

小糸の奴め、悪い癖が出やがったな。あれさえもつと控えめにやりやア、見板も張れるだろうにヨ。

ああ、もう。何で与乃介にあんな女をあてがっちゃったんだか。くそ、奴があれを言う前に、何とか出来ねえもんか…。

源太郎は、眠気も酒も吹き飛んでしまい、思わず搔卷を握り締めた。「わちきアこの身が憎うおすヨ。ぬしにどんなに惚れても、所詮はこの苦界で身を売るのが商売。大門を一步出ればぬしとは住む世界が違う。哀れだと思っておくれなら、また来ておくれかエ？」

源太郎は冷たい汗が流れ落ちるのを感じた。手遅れだ…。

「アレサ、きつとかえ？蓮の葉の上で来世は夫婦と思っておくれかえ？」

与乃介、返事をするんじやアねえ、拝むからヨ。

その願いも虚しく、衝立ての向こうから、ああだか、ううだかわからぬ声がする。

「イヤイヤ。ぬしやア、大門の向こうに住んでおいでだ。ここを出たら、小糸のことなぞ、お忘れだヨウ。ホンにならば、小糸はしっかりとした約束がほしい…」

来た来た来た。

「その言葉がホンなら、起証を書いておくんナ」

源太郎は、今にも暴れそうになった。

イヤ、暴れ込んでやればよいのだ。

友人が女郎の食い物になると判っていて、止めなかったなぞ、情けねえじやねえか。

イヤ待てよ、幾ら女が苦手と言っても、まさか起証と言われて気付かぬ阿呆は居るわきやアねえ。

起証(文)とは、客と女郎が交わす誓紙の事で、体を売っても心だけはその人のものであると書かれたもので、女郎と客が名前を書く。

良く使われたのは、紀州熊野神社の牛玉宝印と言う護符を、勸進比丘尼か

ら買い、その裏に書くものだ。これに書かれた誓いを一枚破れば熊野神社の御使いである八咫鳥が三羽死ぬと言われた。

真剣に交わす客と女郎もあつたが、手管としては客をつなぎとめるために行われた例が多い。

つまり、小糸は与乃介の不慣れを良い事に鳴にしようとしていると言つことだ。

しかし、与乃介だつて男だ。そして起証と言え、破られる事が多いつまり「うそ」と同義であると言つこと位有名な事だ。知らぬはずがないと思つていたので。

「ホンにかえ。ああ、嬉しいねえ。…でも…」

承知しやがったのかえ？あの馬鹿、ここまで阿呆だとは思わなかったぜ…。

「もうすぐ晦日の紋日。わっちはぬしと…。でも、紋日には、布団を新調して、着物も新調するのがこの習い。おまけにこんな場末とは言え、紋日では買い切られなければならないのが掟…」

起証を約束させた後に、必ず無心をするのが、小糸の決まり手なのだ。

「わっちを紋日に買い切ってくれるような頼りになる人は、ぬしより他はおりイせん。ぬしやア、紋日にわちきを買切っておくれかえ？」

さすがの源太郎も余りの小糸の大胆さに、肝が冷える思いだ。

明らかに与乃介がこうした場所に不慣れなのを見越して、ばれねエと思つてやがるな。

紋日に女郎買い切ると言うことは、普段妓楼に上がつて女郎を買うのとは訳が違う。

小糸がちらりと言つたように、布団や着物を新調し、更に、祝いと称して手ぬぐいや帯を回りのものに配る。その上で客に一日買い切つて貰らい、祝儀として客は金をばら撒くのだ。それには目の飛び出すような金が掛かる。上客のついている女郎ならば、ねだれば気軽に出してもらえらるだろうが、一介の女郎では、紋日の散財を恐れて近寄らない客がほとんどだ。

* お願いとおことわり *

本 PDF は試し読みのために作成いたしました。

刊行年の古いものは、当時と現在の製作環境の違いにより、実際の頒布物の見た目と異なる場合がございます。

また、試し読みでは、頒布物の全作品をサンプルにしている場合と、当時の原稿が手元にないなどの事情で、一部作品のみサンプルとしている場合がございますので、あらかじめご了承くださいませ。

なお、有償無償を問わず、本 PDF の内容を、ご自分の作成物として一部、または全てを再配布する、あるいは本 PDF を有償にて再配布する行為はご遠慮くださいますようお願いいたします。

作成：寝床屋

URL: <http://wwbtd.mods.jp/nedocoya/>

Mail: nedocoya@gmail.com

Twitter: [@nedocoya4pr](https://twitter.com/nedocoya4pr)